40 感謝 × 規則の尊重

扇子（せんす）

年　　組（　　）

「学校の外で、知らない人に声をかけられても、返事をしてはいけません。すぐににげるか、大きな声を出しましょう。声が出なければ、防犯（ぼうはん）ブザーを鳴らしましょう。」

学校でも家でも、いつもそう習っている。それがきまりなのだ。特に、友達とはなれて、１人で下校する道になると、トモアキは周囲（しゅうい）に気をつけている。

不審（ふしん）者はどこからやってくるか分からない。気をつけて、道草をせずに、できるだけ早足で歩くようにしている。

それにしても――。

今日は暑い。頭がクラクラして、今にもたおれそうだ。

「だいじょうぶ？　真っ青だけど。」

とつぜん声をかけられた。顔をあげると、正面におじいさんがいた。ニコニコと笑っている。「ちょっと休んだら？ほら、ここの木かげで。」

トモアキは、おじいさんにさそわれるままに、木かげに入った。

「最近は、めっきり暑いからねえ。」

おじいさんは、パタパタと扇子（せんす）であおいでくれた。風が心地よかった。しばらくすると、頭がスッキリとしてきた。

「おや、マシになったかい？」

すごく楽になってきた。「ありがとうございます。」と言おうとしたところで、ふと気づいた。

このおじいさんも、まったく知らない人なのだ。話しかけてもいいものだろうか。

トモアキは、おじいさんにお礼を言うべきでしょうか。言わずに去るべきでしょうか。あなたの考えと理由を書きましょう。

話し合って考えたことを書きましょう。